筑波学院大学紀要第１集　139～150ページ　　2006年

相互理解を目指す日本の英語教育

古徳　聖子*・永井　彩子**

English Language Teaching in Japan: A New Perspective

Shoko KOTOKU *　and　Ayako NAGAI **

Abstract

For many years, the low English proficiency level of Japanese students has been a big concern not only within Japan, but also in the international level. Several attempts have been made to reform the practices of English language teaching based on the results of researches in the past. The Ministry of Education of Japan has done several changes, experimented with different teaching methods to remedy the problems. One important study done by Takizawa (1982) says that ELT problems in Japan can be grouped into eleven vital topics some of which include problems of teacher quality, learning objectives, entrance exam system in Japan, relation between English study and culture, and others.

This study is related to the last of these items. A survey was made among university students to check the current stereotypes people have of Japanese learners of English. The aim was to check reasons why Japanese students do not speak English, do not express themselves during English classes, and are not as animated as they should, etc. The findings indicate that the reasons are, not because of language. The reasons are largely influenced by culture. This paper will report the results of the survey.

キーワード：英語教育、外国語指導助手（ALT）、第２外国語習得、言語と文化、相互理解

はじめに

本論文の一部は2005年、静岡県で開催された全国語学教育学会、国際会議でポスター発表されたものである†。

「日本人学生は、なぜ自分の意見を言わないのか」、「なぜ質問をしないのか」、「なぜ目を合わせないのか」、私たちは、日本で英語を教える外国語指導助手（ALT）が抱える、このような疑問や不満をもとに、日本人学生には「なぜ、そのような行動をするのか」また、ALT には「なぜ、日本人学生はそのよう

＊　国際学部比較文化学科４年、Tsukuba Gakuin University
＊＊　国際学部国際社会学科４年、Tsukuba Gakuin University
†　JALT2005: 31st Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exposition.

な行動をすると思うか」というようなアンケート調査を行った。この二つの調査結果を比較、考察することにより、ALTと日本人学生は互いの異なる文化を十分に理解しているのか。また、どのような場面で異文化摩擦を起こすのか。これまでの、英語教授法なども振り返りながら、日本の英語教育現場において、相互理解を目指す教育には、今後何が必要か、その改善策を見出していきたい。

１．日本人の英語力

１．１　世界の評価

近年、日本の「英語教育」に関する批判は国内に限らず海外からも厳しくなっている。例えば、クラーク（1978）‡は次のように述べている。

「…日本人が英語を勉強するために払っている努力とオカネのわりに、その成果はお粗末だと感じています。」

また、ポラック（1979）は次のようなコメントを挙げた

「カセットにしろ、テレビにしろ、勉強する気があれば、日本てなんでもそろっているでしょう。とっても恵まれていますね。それでいて、日本人はどうして語学が進歩しないのかよくわからない。」

そして、次のような記事も書かれた。

The English proficiency level of Japanese students is frustratingly low. In spite of all the time, energy and money spent on formal study of English, the level of proficiency of most Japanese students is not sufficient for full time academic study in the United States. (Frey, 1973)

１．２　英語教育と問題点

日本よりも外国語教育の効果がさらに低い国もないわけではない。U.S. News & World Report に指摘されているように米国などはそのよい例であろう（読売新聞、5/11/1981）。

日本の英語教育にはどのような問題があるのだろうか。日本の英語教育の問題点を項目別に分けると11のトピックに要約ことができる（竹蓋、1982）§。（１）教師の質（２）生の英語に触れる機会（３）外国語学習の厳しさ（４）学習の目標（５）入学試験（６）指導要領（７）学習意欲（８）教授法（９）表現意欲（10）日本語化（11）言語と文化、これらを以下に要約する。

（１）教師の資質

日本の英語教育は英語教師の実力不足より、資質が低いことが指摘されている。それは教師の英語力の低さ、英語を教えることへの自信の無さがある。しかし一番の原因は、教師が現代英語の実際を余りに知らなすぎるという点である。

（２）生の英語に触れる機会

日本の英語教師は現代英語の facts に触れる機会が極めて少なく、ただ教科書、参考書、作品というものに接してきただけに過ぎず、卒業するとそのままルーティーンになっている。その結果「死語同様の語」を教えてしまう。

（３）外国語学習の厳しさ

日本の英語教師、学生が、実際の外国語学習の厳しさを理解している数は少ない。言語、音声言語活動、言語音声が複雑、難解なものであるということを真に理解していない。

（４）学習の目標

日本人学習者には、はっきりとした英語

‡　竹蓋幸生『日本人英語の科学』研究社出版、1982（p180）
§　詳しくは、竹蓋幸生『日本人英語の科学』研究社出版、1982（p182−194）に記述されている。

の学習目標がなく、どの様な質と程度の英語能力を目指すべきか、ということが少しも具体的に示されていない。

（5）入学試験

日本人にとって英語学習は入学試験の合格、就職試験の合格に必要不可欠なものであり、その試験問題は「聞き、話す力のテスト」に対する配慮が少なく、受験英語に強くなるということは会話ができなくなるということになる。

（6）指導要領

日本の英語学習の指導要領による制限が指摘され、中学から大学までの８年間の英語学習中、何をどのような順序で学ぶかということが疑問に出されている。

（7）学習意欲

日本の学生側による学習意欲の欠如が指摘されている。英語学習の大半が受験のため、進学のためであり、ことばとしての英語学習に意欲を持っていないのである。

（8）教授法

日本の英語教師は授業中（技術）の話ばかりに興味を注ぎ、英語という言語についての学習法の心理についてあまり知らない。教授法の改善を提唱する声が多い。

（9）表現意欲

日本人は英語を話す、書くことの表現行動には自信がなく、また、その能力、意欲も低いということが明らかにされている。

(10) 日本語化

英語学習においてJapanese Englishいわゆる「和製英語」「日本発想に基づいた翻訳の英語」が学習者の英語上達の妨げになっている。

(11) 言語と文化

英語学習を「外国語学習」だけと考え、言語と文化を切り離した学習のため、日本人は異なった文化を理解し、強調していくことが苦手とする人が多くなっている。これらについての詳しい説明は『日本人英語の科学』に論じられている。

さて、この研究のテーマは、どちらかというと、上記の最後の項目に深く関わっている。本論に入る前に、ここで、試験結果に表れた日本人の英語能力をもう少し眺めてみることにする。

数年前にEducational Testing Service（ETS）Director、P.Eウッドフォード氏が、NHKスタジオ102「日本人の英語力判断」という番組に出演し、以下のTOEFLの得点をもとに日本人の英語力について語った。

スウェーデン	590
ドイツ	588
スイス	578
シンガポール	550
フィリピン	528
香港	501
日本	453

この得点は680を満点とするテストの各国別総得点の平均点だということだったが、ウッドフォードは日本の得点は世界106カ国中85位、アジアで18位と極めて厳しい結果であると語った。その他、日本人英語力ランキングからも日本人の英語力の厳しい結果が見られる。

	日本	世界
1. Listening Comprehension	49	51.3
2. Structure & Written Expression	47	49.4
3. Reading and Vocabulary	48	50.3

（竹蓋、1982、p.10）

２．さまざまな工夫

２．１　日本の英語教育と教授法

「21世紀日本の構想」懇談会に対する総理大臣報告（2000）が発行されてから、日本の英語教育に関する様々な議論が教育委員会で成されてきた。そして、国際時代に伴った国際社会の中に位置づけると共に日本人の英語能力を上げることは国家の大きな課題となった。この大きな課題を越えるための手段としてJETプログラムは設置され、外国から色々な外国人講師を日本の学校でアシスタント教師として招くことにした。（吉田、2001）JETプログラムとは、The Japan Exchange and Teaching Program（語学指導等を行う外国青年招致事業）の略称で、日本に派遣されたALT（外国語指導助手）は各自治体において、学校等で外国語指導助手をしながら、国際交流活動に活躍し従事する。以前は外国語の教育指導プログラムという側面が強かったが、せっかく優秀な外国の青年が日本に滞在するのであるから、ただ英語を教えるのみではなく、同時に国際交流を深めようという目的でJETプログラムは創設された。JETプログラム参加者は日本の地域社会で色々な活動をし、成功を収めたが、日本人学生の英語教育に関する効果は見られないように思われた。（Mc Connell,2000）日本人学生は英語能力レベル、特に会話能力（communicative competence）は進歩していない。マックコルネル氏はコミュニカティブ英語教授法の失敗の原因は、多くの外国語教師は伝統的（古い）教え方とコミュニカティブ英語教授法の区別ができなかったことにあると述べた。（吉田、2001）

さて、日本で導入された英語学習教授法を調べてみると、次のようなことがわかった。日本の英語教育に影響を及ぼした教授法は色々とあるが、大きく分けると二つある。一つはパーマーが導入した「オーラルメソッド」、もう一つは第二次世界大戦後日本に登場した「オーラルアプローチ」である。＊＊

文部科学省学習指導要領に指摘されたように、1960年代英語の授業は47の技能と同時に外国の文化を学ぶことを重視した。

１．文法・翻訳法

文法・翻訳法とは、まず文字基本文法を覚え、次に例外規則を学ぶという方法。最も古典的な方法ではあるものの、学習の進み方と実際に使えるかどうかは別問題で、現在の外国語教授法では、「文法・翻訳法だけではだめ」との考え方が主流。東京オリンピック（1964）そして大阪国際博覧会（1970）後、学校の英語教育は総合会話又は表現力、つまり「英語を理解し、自分を英語で表現できるように」を目的にした。

２．オーディオ・リンガル法

オーディオ・リンガル法は文法・翻訳法が「読み・書き」中心だった事に対し、「聞く・話す」を優先させる教授法。一般的に言われていることとしては日本人が日本語を話す時、あれこれと文法を考えずに無意識で話すように、外国語を学ぶ際にも、この「習慣化」を勧める。「読み書き」だけで身につくものでもないが、同様に「聞く、話す」だけで身につくものではない」という反論がある。1978年の改革を得て、1989年の学習指導要領改革では、初めて、コミュニケーションという言葉が使われるようになった。最近の指導要領には「学生が英語を実用的に使えるように“コミュニカティブコンピテンス（communicative competence）が必要だ」と書かれている（吉田、2002）。コミュニカティブ教授法（CLT）は学習内容だけを中心にするので

＊＊ 詳しくは、田崎清志『現代英語教育教授法総覧』大修館書店（1995）に記述されている。

はなく、学習の意味やコンテキストなどを中心として、学生の４つのコンピテンス（能力）（１）文法的能力、（２）社会言語能力、（３）会話能力、（４）戦略能力を重視しなければならない。（Canale & Swaine, 1980）

３．コミュニカティブ・ランゲージ・ラーニング

コミュニカティブ・ランゲージ・ラーニングは、上のような歴史を経て、現在注目される教授法だ。この教授法では、文の構造や語法よりも、実際にどのようなコミュニケーションが行われるのかが重要視される。いわば、実践の中で実践力を養うもの。

その他にも沢山の教授法が提案されていたが、日本人学生の英語能力取得には繋がらないようだ。吉田によると英語教師（教授法）に原因がある。「どのように学習すると、効果的に外国語が身につくのか」というテーマは日本の応用言語学の大きな課題になり続けた。

私たちは、ここに、もう一つの理由があるのではないかと疑問を持って、この研究を行った。その議論に入る前に、「効果的な外国語の習得法」に大きく関わっているテーマを紹介する。

Savignon（2000）[††]は Communicative Language Teaching（CLT）は英語の授業の狙いを達成するためには、言語学習の構成要因を理解する必要があると述べる。これらの学習構成要因は以下のものである。

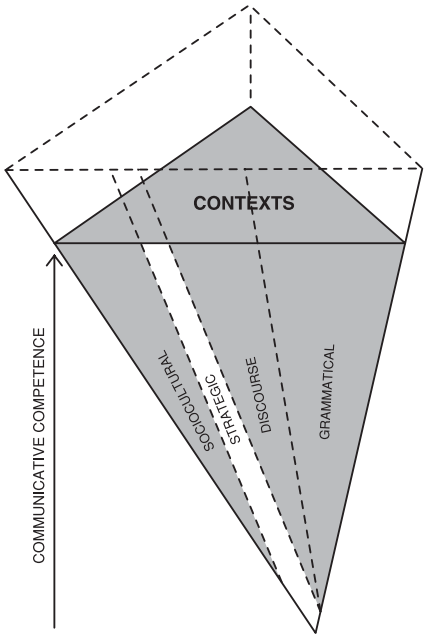

Fig. 1　Components of communicative competence.

[††] Savignon, S. (Ed.). (2002). Interpreting Communicative Language Teaching. New Haven &London: Yale University Press.

３．別の視点から見る英語教育

３．１　言語と文化

今日まで日本での英語教育法はこれらの学習構成要因をもとに施された。しかし、数年間の政府や様々なレベルでの英語教育の努力と工夫の成果はまだ見られていないようだ。日本人学生の英語が上手くならない原因は必ずどこかにあるはずだ。

そこで、私たちは、最近よく耳にする言葉「国際理解」というような視点から、英語学習を考察することにした。日本人学生の英語力が、その努力とお金をかけているわりに上達しないのは「英語の勉強の仕方がわからない、英語が下手、単なる英語が話せない人達」という問題ではないであろう。日本人学生の英語力が進歩しない理由の一つに、数年前、「言語と文化」にその原因があると言われた。そこで、「言語と文化」の関係を考察する。

はじめに、日本人学生が外国語の授業中にする態度と行動について、ALTからよく聞くコメントから見てみよう。色々なコメントがあるが、ここでは代表的なものだけを取り上げる。これらは上記で述べた日本の英語教育に対する批判によく似ている。

＊日本人学生は授業中静かで、自分の意見を述べたり、質問したりしない。
＊日本人学生は授業中に質問しないで、授業の終了後、個人的に質問をしに来る。
＊日本人学生は先生に質問をされても、あまり返事をしない。または、できない。
＊日本人学生は説明するのが苦手で、自分の意見を長く答えることができない。
＊日本人学生は先生から目をそらしたり、下を向いたりする。
＊日本人学生のほとんどが恥ずかしがり屋だ。

３．２　調査目的・方法・内容

私たちは、これらのコメントをもとに、もしかすると、これらのものが日本人学生の英語能力を妨げる要因になっているのではないだろうかという疑問を持った。なぜ、日本人学生は授業中に上記のような行動をするのだろうか。上記で挙げられた外国人講師が持っている日本人学生のイメージとコメントを確認するため、私たちは日本人学生30名を対象に次のようなアンケート調査を行った。アンケートの項目と結果は以下の通りである。

＊１　日本人学生に行く
調査１　（日本人学生用アンケート）

「下記の項目は、海外から来た外国語教師から見た、日本人学生に対する行動についての疑問をもとに、作成されたアンケートです。自分が最も近いと思われる数字に○をつけて下さい。もしも、その他の答えがある場合は（　　）の中にその他の理由も書いて下さい。」
（※英語の授業の場合）
質問１．日本人学生はなぜ授業中あまり質問をしないのですか？
１．話をしている途中で質問するのは失礼
　　０…１…２…３…４…５
（思わない）　　（強く思う）
２．こんな質問をしたら笑われるのではないかと思う
　　０…１…２…３…４… ５
３．私だけが思っている質問だからしない
　　０…１…２…３…４… ５
４．やる気がないから
　　０…１…２…３…４… ５
５．その他（　　）

３．３　調査結果

＊質問１の結果（ポイントの高かった回答順に以下に述べる）

１．こんな質問をしたら笑われるのでないかと思う
２．私だけが思っている質問だからしない
３．話をしている途中で質問するのは失礼
４．やる気がないから

質問２．日本人学生はなぜ先生と目を合わせないのですか？

１．目を見ることは失礼
２．目を見る行為に慣れていない
３．先生がこわいから
４．恥ずかしいから
５．その他

＊質問２の結果

１．目を見る行為に慣れていない
２．恥ずかしい
３．目を見ることは失礼
４．先生がこわいから

質問３．日本人学生はなぜ自分の意見を言わないのですか？

１．恥ずかしい
２．周りの目が気になる
３．目立ちたくない
４．英語が話せないため
５．その他

＊質問３の結果

１．周りの目が気になる
２．目立ちたくない
３．英語が話せない
４．恥ずかしい

質問４．なぜ日本人学生は質問に対する答えが短いのですか？

１．簡潔に述べた方が良いから
２．長々と話すと自慢や言い訳に聞こえる
３．周りの人の意見も聞きたいから、短めに答える
４．外国人の先生が嫌いだから
５．その他

＊質問４の結果

１．長々と話すと自慢や言い訳に聞こえる
２．簡潔に述べた方が良いから
３．周りの人の意見も聞きたいから、短めに答える
４．外国人の先生が嫌いだから

質問５．　なぜ日本人学生は授業中ではなく、授業後に質問するのですか？

１．個人的な質問だから
２．ゆっくり、詳しく話せるから
３．自分だけがわからなかったと思うから
４．小さな質問をするのが恥ずかしいから
５．その他

＊質問５の結果

１．個人的な質問だから
２．自分だけがわからなかったと思うから
３．ゆっくり、詳しく話せるから
４．小さな質問をするのが恥ずかしいから

質問６．なぜ日本人学生は、わからない時、「わかりません」と言わずにただ「黙って何も言わないのですか？

１．考えているから
２．わからなくても、考える姿勢を見せたほういい
３．「わかりません」と言ったら自分が馬鹿みたいだから
４．先生が嫌いだから
５．その他

＊質問６の結果

１．わからなくても、考える姿勢を見せた方がいいから

２．「わかりません」と言ったら自分が馬鹿みたいだから
３．考えているから
４．先生が嫌いだから

次に、日本で英語を教える外国人教師30名を対象に、日本人学生のする行動に「困難を感じるか」、また、「なぜそのような行動をすると思うか」というアンケート調査を行った。日本語で書かれたもとの原稿は英語に翻訳された。アンケートの項目と結果は以下の通りである。

＊２　外国人教師に聞く
調査２（ALT 用アンケート）

「下記の項目は、多くの ALT から寄せられた日本人学生が英語の授業の際にする行動に対する、疑問や不満をもとに作成されたアンケートです。自分が思う一番近い答えを１つ選び、○を付けてください。」

質問１．
① 日本人学生が授業中に質問しないことに困感を感じますか？
　はい　／　いいえ
②なぜ、日本人学生は授業中に質問をしないと思いますか？
（１）わからない（２）恥ずかしい（３）文化的な理由（４）私が嫌いだから（５）英語が話せないから（６）英語が嫌いだから（７）その他（　　）

＊質問１の結果
質問１①はい　と答えた人　17人
質問１②の回答で多かった順１～３までを以下に述べる
１．文化的な理由
２．恥ずかしい
３．英語が話せないから

質問２．日本人学生が目を合わせないことに困感を感じますか？
＊質問２の結果
質問２　①はい　と答えた人　０人
質問２　②の結果
１．文化的な理由
２．恥ずかしいから

質問３．日本人学生が授業中に自分の意見を述べないことに困感を感じますか？
＊質問３の結果
質問３　①はい　と答えた人　23人
質問３　②の結果
１．文化的な理由
２．英語が話せない
３．その他
（発言する能力がない / 練習していない / 聞くことに慣れている / 英語に自信がない）

質問４．日本人学生が質問の答えに対して、返事が短いことに困感を感じますか？
＊質問４の結果
質問４　①はい　と答えた人　３人
質問４　②の結果
１．英語が話せない
２．文化的な理由
３．わからない

質問５．日本人学生が授業中ではなく、授業の後に質問することに困感を感じますか？
＊質問５の結果
質問５　①はい　と答えた人　０人
質問５　②の結果
１．わからない（困難ではないが、不思議・奇妙）
２．恥ずかしい
３．文化的な理由

質問６．日本人学生がわからない時、「わかりません」と言わずにただ黙っていることに困難を感じますか？
＊質問６の結果
質問６　①はい　と答えた人　14人
質問６　②の結果
１．恥ずかしい
２．英語ができないため
３．わからない

以上が、日本人学生に聞いたアンケート調査１と日本で英語を教えるALTに聞いたアンケート調査２の結果である。調査１の結果より明らかになった事は、日本人学生がそのような行動をするのには、言語に関わる理由よりも、文化的影響が大きな要因となっていることがわかった。また、調査２を行ったことにより、ALTの多くが、日本人がそのような態度をするのには文化的な背景によるもの。と考えていることがわかった。では、調査結果を見ながら、日本人学生がする行動には、どのような文化背景が影響しているのか考察していこう。まず、はじめに、質問３を見てみよう。「日本人学生はなぜ自分の意見を言わないのですか？」という質問に対し、多くの学生は「周りの目が気になる」「目立ちたくない」と答えている。

４．英語学習の文化的背景

４．１　分析と考察

これは、日本では「出る釘は打たれる」という言葉があるように、あまり自分の意見を言いすぎたり、派手なことをしたりすると、グループの中で突出し、排斥されてしまうという心理が隠れていると考えられる。自分の意見をあまり言わないと言われる日本人であるが、国弘正雄（1976）‡‡は「日本の沈黙の美学」について次のように述べている。

「…われわれ同質の集団の中においては、必ずしも意思疎通は言語を使ってする必要がない。……以心伝心的なコミュニケーションが可能になる日本の場合は、言ってみれば全体が大きな家族みたいなもので、日本人の間のコミュニケーションは往々にして言語による必要を認めない。そこでわれわれは、たとえば以心伝心というような美学を発達させてしまった。……ことあげ（言挙）せずというのがわれわれにとっての美学であった。「ことだま（言霊）のさきわう（幸ふ）国だというようなことも奈良朝時代にはいっていったのですけれども、平安朝以降になると、ことあげせずということが、ことに男子の場合は美徳とされるようになった。みずからのうちなる思いや、感情、情感をやみくもに表に出すことは、特に男性にとってはうとましいことである。あまりいいことではないという、そういう一種の社会的な規律、訓練というものをわれわれは身につけた。そして沈黙の美学というべきものを発達させたようであります。」

質問４の「なぜ日本人学生は質問に対する、返事が短いのですか？」という質問に対し、日本人学生は１．長々と話すと自慢や言い訳に聞こえる　２．簡潔に述べた方が良いから。と回答している。

一方、「なぜ日本人学生は質問に対する返事が短いと思いますか？」との質問に、ALTの一番多かった回答は「英語ができないため」と回答していた。

日本人にとっては答えを「簡潔に述べること」が美とされていて、そのため学生は短め

‡‡ 国弘正雄『異文化に橋を架ける：国際化時代の語学教育』英語教育協議会、1976、（p18-20）

に答えているのに対し、ALTは学生が短く答える理由は言語面の問題だと考えていたのだ。つまり、文化の相互理解が十分に行われていないことを表している。

学生は“自分の意見を持っていない”わけでも、“何も考えていない”わけでもなく、自分の意見はあるが、意見を述べることに対する文化的、社会的、抵抗のようなものがあり、自分の意見を発言することに対する抵抗やためらいがあるのだ。

また、質問６の「なぜ日本人学生は、わからない時、「わかりません」と言わずにただ黙って何も言わないのですか？」という質問に対して、多くの学生は「わからなくても考える姿勢を見せたほうがいい」「わかりません。といったら自分が馬鹿みたい」と回答している。

「わからない」ものを「わからない」と言うのが当たり前と考える文化もあるが、日本ではわかりませんということを恥であるようにとらえ、間違えるくらいなら言わない方が良いと考える傾向があることを表している。

ALTに行ったアンケート調査２の質問６で、次のようなコメントが書いてあった。

「日本では、早く答える事よりも、正しい答えを述べることが、重要視されているようだが、英国では正しい答えよりも、早く答えることを子供の頃から求められている。そのため、生徒は間違えてもなんでも、質問されたら早く何かを答えようとする」そこには、早く答えることが重要とされる文化と、正しい答えが重要とされる文化間の違いが見られた。

しかし、多くの外国人講師はこのような態度をとる日本人を、「恥ずかしがり屋の日本人」、「何も考えない人々」と捉えてしまうことが少なくない。自分達の国の価値観や常識を、日本人学生の姿と重ね合わせ、その常識から遠く離れた日本人の行動を見て、「何を考えているかわからない」「奇妙で不可解」のように捉えてしまう。つまり、現代の日本の英語教育現場では、互いの文化で何が尊重され、美と考えられているのか、という相互理解が十分にできていない。と言えよう。

世界的に見て日本人のTOEICの点数は最低だ。だから、英語教育を広めよう。日本人も授業中に意見をどんどん述べ、外国人のようになろう。というのが現在の日本の英語教育といえる。

国弘正雄（1976）[§§]は、われわれ日本人ないし、日本というものが、世界的に見た場合にはたいへんに理解することがむずかしい、かなりユニークな存在である。と次のように述べている。

「…どういう点がユニークか、それは何といっても日本が世界に一六〇ほどある国の中で、それこそまれにみるほどの単一性、均一性を持った国であるということです。」

それだけに、われわれの方から、積極的に理解を求めるという必要も大きいわけであり、その努力の不足がなげかけられているのである。

日本で行なわれた英語教育における報告の中で吉田（2001）[＊＊＊]は、日本人学生の英語学習環境について次のように述べる。

§§　国弘正雄『異文化に橋を架ける：国際化時代の語学教育』英語教育協議会、1976、（p13）

＊＊＊　Yoshida. K. (2001). Fish Bowl, Open Seas and the Teaching of English in Japan. TESOL Matters Vol. 12 No. 1.

「日本の英語教育はFish Bowl Model（FBM）にたとえることができる。FBMとは、茶碗に生きている魚を指す、次のような特徴を持つ：（１）魚は他のものに頼る（えさが与えられるのを待つ）（２）魚は理想的な環境におかれている（茶碗の中にいる他の魚と一緒に生きるため、きれいな水や十分なえさがある、などのような環境を守る）（３）茶碗の中は魚にとって、人工的（isolated）な環境である。日本人学生の英語学習環境はこのような人工的な環境（茶碗）におかれている。FBMのような環境は言語学習取得には良くない。日本での英語教育はFBMモデルのように（１）学生は学習に対する態度が非積極的であり、先生から来る学習するもの（えさ）を待っている、（２）間違えが許されない、完璧な答えを求める、というような理想的な環境であり、（３）コミュニケーションが認められず、学習は総合コミュニケーションではなく、狭い範囲（文法）を中心的におこなう。」

吉田は「英語学習者はOpen Seas Model（OSM） に指摘される「海にいる魚」と同じようなものにならないといけない」と指摘する。英語を学ぶのに、日本人学生は海にいる自分の力で生きている魚のように他のものの助けを待つのではなく、自分で学ぶ意志を持たなければならない。Open Seas Model（OSM）の特徴は：（１）自立性（２）環境適応力（３）共存を認める。英語学習では学生が先生に与えられるものを待つのではなく、自分の力で、積極的に学習を進める（２）環境に適応できる力を持つ（３）他の魚と一緒に共存できる。ことが必要である。

結　論

以上教授法、外国人教師と学習環境という三つの視点から、異文化理解と英語教育を関係付けた。外国語（英語だけではなく）を身につけるためには、言葉はもちろんのこと、それと同時に相手の文化を知ること。また、理解することが必要である。外国語を教える教師にとって、異文化理解は生徒の生まれ育った社会や、心理、文化的背景を知り理解する必要がある。特に日本人学生は、無理やり「Don't Be Shy」、「Speak Up」、「Don't be Afraid to Make Mistakes」などと言われても、そのようにすぐに切り替えることができない。実際は、できないのではなく、そうなるには時間がかかるのである。自分の文化と他の文化では、どのような点が異なり、誤解を招くのか、そこをしっかりと理解し、相互理解ができるように、今後の日本の英語教育には、もっと積極的に自分の文化を伝えられるようになる必要があるのではないだろうか。

参考文献

伊村元道『日本の英語教育200年』大修館書店、2003

国弘正雄『異文化に橋を架ける：国際化時代の語学教育』英語教育協議会、1976、（p13、p18-20）

高梨建吉、大村喜吉『日本の英語教育史』大修館書店、1975

竹蓋幸生『日本人英語の科学』研究社出版、1982（p10. p180. p182-194）

田崎清志『現代英語教育教授法総覧』大修館書店、1995

羽鳥博愛『英語教育の心理学』大修館書店、1977

Savignon, S.（Ed.). (2002). Interpreting Communicative Language Teaching. New Haven & London: Yale University Press

Yoshida. K. (2001). Fish Bowl, Open Seas and the Teaching of English in Japan. TESOL Matters Vol. 12 No. 1

謝　辞

最後に、本論文を執筆するに当たって、池口セシリア先生のご指導を頂きました。

APPENDIX

(Other comments from ALT`s)

" I didn't think we can. "

" I've thought students who ask questions all the time, others who feel happy/confident to express their opinions. It really depends on the class atmosphere and the individual student! "

" I don't feel offended but sometimes I do feel frustrated when I ask a student individually " Do you understand the homework "she says yes, and then the next day she hasn't done it because she didn't understand. I'm trying to find a way to communicate back. "

" I 'm not offended by my student's uncomfortable, but it makes me uncomfortable, because I don't know how to find out what they're thinking, or how they are feeling. "

" The more I treat students with respect the more they become open and responsive. "

" Correct answer is more important than a quick answer (UK is opposite)

" Small groups encourage students to speak out. "

" When the teachers provide a good environment creating a bridge between the students culture and the cultures of English speakers, good communication happens. "